慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働価値説の諸問題
Sub Title	
Author	伊東, 岱吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.8 (1932. 8) ,p.1279(75)- 1324(120)
JaLC DOI	10.14991/001.19320801-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320801-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

勞働價値說の諸問題

伊東岱吉

勞働價値說に於ける究極の問題は、勞働と價値との必然的關聯の證明に存する。マルクスが先人の試みて爲し得なかつた此問題を解決したのは、彼れが資本制生產諸關係の歷史的形態を解明せんとして勞働生產物の價値形態に到達し、價値を量的方面のみならず、その質及び形態より把握せんと試みたことに據るものである。價値形態とは要するに資本制生產の最も單純・一般的な歷史的形態に外ならぬ。然るに此歷史的形態は、如何なる社會をも貫徹すべき自然法則が資本制社會に於いて取る一定の現象形態である。從つて斯かる自然法則の理解は資本制社會の特質・勞働生產物の價値形態の理解の前提であり、マルクス勞働價値說を了解せしむる鍵鑰である。

斯かる見解の下に、筆者は前回の拙稿(「勞働價値說の基本的考察」三田學會誌、昭和七・三)に於いて不充分乍ら自然法則の展開を行つた。本稿はかゝる前置きの下に、自然法則が資本制社會に於いて取る歷史的形態を吟味し、これよりマルクス勞働價値說を考察して、前回の課題を果たさんとするものである。

『自然法則は總じて揚棄され得ざるものである。歷史的に異つた狀態の下で變じ得るのは、かの法則が自らを貫徹するところの形態のみである。そして社會的勞働の聯絡が個人的な勞働生產物の私的交換として行はれてゐるやう

な社會狀態の下で勞働の比例的配分が自らを貫徹するその形態は正にこれら生產物の交換價値である。』（旁點筆者―註一）このマルクスの注目すべき言葉の眞意を展開することこそ、本稿の主題たるものである。

註一　Marx. Briefe an Kugelmann, S. 54 (Elementar Bücher des Kommunismus)

一

資本制生產諸關係の歷史的特殊形態とは如何なるものか。これに關するマルクスの文言を引用すれば次の如くである。

『勞働生產物の價値形態は資本家的生產の仕方の・最も抽象的な・しかしまた最も一般的な・形態であつて、資本家的生產の仕方はこれによつて社會的生產の特殊な一樣式として特徵づけられ、またかくして同時に歷史的に特徵づけられる』（旁點筆者―註二）

『市民的社會においては、農業は次第次第に單なる一產業部門となり、全く資本によつて支配される。地代も同じである。土地所有權が支配してゐる總ての諸形態においては、自然關係がなほ優勢である。資本の支配してゐる諸形態においては、社會的な、歷史的に創造された要素が優勢である。地代は資本を理解せずしては理解されない、しかし資本は地代を理解せずして十分理解し得られる。資本は市民的社會の一切を支配する經濟力である。それは出發點ならびに終局點を形成せねばならぬ。』（旁點筆者―註三）

兩引用文は一見矛盾するやうに見える。即ち前文は資本制生產諸關係の特殊形態を勞働生產物の價値形態に求め、後文はこれを資本に求める。ところで、資本が問題となるのは資本制生產に於いてのみであるが、勞働生產物の價値形態は商品生產全般に關する形態であつて資本の成立以前に於いても問題とされ得る。故に、此疑問は商品生產と資本制生產との關係を明らかにすれば自ら氷解する筈である。

資本制生產と商品生產とは何等別個のものではなく、寧ろ資本制生產は商品生產の高度に發展したものに外ならない。從つて商品生產一般の特殊形態は同時にまた資本制生產の特殊形態を構成するのである。これを商品と資本との兩範疇について考察して見よう。假りに、後の引用文に從つて資本より出發するとしても、資本を理解せんが爲めの論理的――歷史的前提は勞働生產物の商品形態或は商品の價値形態に外ならぬ。蓋し、資本の起點は商品流通であり、その最初の現象形態は貨幣である。貨幣は商品の完成であり、貨幣形態は價値形態の最も發展せる形態である。商品が發展して貨幣となり、貨幣が轉化して資本となるのである。商品は資本制生產の發展に伴つて一定の變形を受けるのであるが、しかも斯かるモディファイされた形態の下に於いて初めて其れは最も豐熟した・全面的交換可能の姿となる。商品形態が勞働生產物の一般的形態となること、並びにかゝる商品が資本制的モディフィケーションを受けて現はれること、この二事は資本制生產に於いて初めて見られうる事柄である。故にレーニンは資本制生產諸關係の二大特徵として次の二つを擧げてゐる。

（一）商品生產が生產の一般的形態となれること、生產物は極めて樣々な社會的生產組織において商品の形態を取るのであるが、これが例外的でなく、偶然的でなく、一般的なものとなるのは商品生產においてのみである。

（二）單に勞働生產物のみならず人間の勞働力そのものが商品形態を取ること。

レーニンの擧げた此二特徵に於て、第一のものは第二のそれに論理的にも歷史的にも先行すべきものであり、それは資本制生產諸關係の最も單純にして一般的な形態である。而して第二の特徵は商品の資本制的モディフィケーションの根柢をなすものに外ならぬ。かるが故にマルクスは資本論冒頭に於いて資本制的商品を問題とせず、たゞ

の商品を問題としたのであつた。故に吾人も以下に於いてマルクス價値概念を取扱ふ場合、先づ資本制的モディフィケーション――生産價格化――を捨象して掛らねばならぬ（註四）。

註　二　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 44. 河上、宮川譯（岩波文庫）一二三頁

註　三　Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung, S. XLIV. 河上、宮川譯序說四七―八頁

註　四　從來屢々圖はされた論爭問題、即ち資本論の冒頭の商品分析と第三卷生産價格說との間に矛盾ありや否やの問題―勞働價値說と利潤率平均作用の問題―に對しては、上述のマルクスの方法論的立場は重要な意義を持つ。資本論冒頭の商品は、唐突として前に置かれた有りの儘の商品ではなく、『具體より抽象への旅』の結果得られた抽象物に外ならぬ。叙述の順序は形式的には研究の順序と異り、斯かる抽象物より出發して具體物を思惟の上で綜合し再生産する『後方への旅』であるが故に、一見するところ、冒頭の商品は前方の旅の終結點とは見えず、寧ろ『先驗的構成で事を濟ましたもの』かのやうに見へもするが、かく解釋することは大なる誤解である。資本論冒頭の商品分析を一、需要供給作用による交換比率の偶然的動搖の捨象、二、資本制生産に於ける利潤率平均作用により惹起さるゝ價値法則の現象の仕方のモディフィケーション即ち生産價格化の捨象、との二重の捨象の下になされたるものと解すれば第一卷より第三卷への論理的發展に矛盾は存せぬものと思はれる。勿論斯かる方法論的解釋は問題の積極的解釋とはなり得ないが。この問題については更らに後述する。

論理的な旅はまた歴史的な旅と並行する。叙述の出發點はまた歴史的な出發點でもあるのである。蓋し論理的な取扱の仕方とは實際には『歴史的形態と妨げになる偶然性とを脱ぎ棄てたところの・歴史的な取扱の仕方』に外ならぬからである。然し乍らこの事は單に並行に止まり、論理的發展が歴史的過程そのものを意味するものではない。故に曾て櫛田河上兩氏の間に行はれた論爭、即ち資本論冒頭の商品は單純商品生産の商品そのものである（櫛田氏說）か、資本家的商品より資本制的モディフィケーションを捨象せる純粹の姿に於ける商品である（河上氏說）かの問題は、勿論河上氏の說が正しかつたものと思はれる。然し乍ら斯る捨象が行はれた以上、此純粹の姿に於ける商品は單純商品生産の商品と並行するものであり、後者をして最も發展せる・全面的交換可能の姿を取らせたものに外ならぬのであるから、これを單純商品生産の條件の下に理解する方が解り易い。故に吾人は以下に於いて單純商品生産の諸前提の下に、而も最も豐熟せる姿に於ける商品を取扱ふであらう。

單純商品生産を歴史的に尋ぬれば、中世の自作農民や都市手工業者の商品生産にこれを求めることが出來る。然し乍ら此時代に於いては、資本制生産に於けるが如く商品生産が一般的・支配的ではなく、剩餘生産物を交換した農民家族は云ふに及ばず、初めから交換を目的として生産を行つた手工業者と雖も、大部分の生産は自給自足の狀態であつたのである。從つて其處には『制限された交換と、制限された市場と、固定した生産方法と、外部に對しての地方的封鎖と、內部における地方的團結とがあつた。』（Vlg. Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. S. 287-293. 河野、林譯反デューリング論第三篇 最も豐熟した姿に於ける商品を資本制的モディフィケーションを受けざる條件下に見出すことは歴史的には不可能であるが、以下に於いて敢てこれを試みんとするは論理的捨象の狀態を明瞭に意識に浮べんが爲めに外ならない。

因にマルクスは單純商品生産を廣く『古代世界に於けるとを問はず、土地を所有する自作農民及び手工業者の間』に見出し、これを中世には限定して居らぬ。（Vlg. Marx, Das Kapital. Bd. III. I. S. 141. 高畠譯第三卷上一四六頁）

二

資本制生産諸關係の最も單純・一般的な形態は商品生産一般に通ずる特徴であり、吾人は以上に於いてこれが勞

働生産物の價値形態に外ならざる事を指摘した。然らば何故價値形態は資本制生産の最も單純・一般的なる形態なのであるか、この問題を更らに立ち入つて論究しよう。

商品生産諸關係の特質として誰にでも直ぐ目に附く事は、それが、私有財産制に依り形式的に、社會的分業の發展に依り素材的に、私的生産を單位とする原子にまで分解されてゐると云ふ事である。單純商品生産を思ひ浮ぶればこの事情は最も明らかである。其處に於いては、生産手段の私有は勞働と結合して私的生産の單位を構成し、私的生産の外部は勿論のこと、その内部に於いても共同的勞働は殆んど見られず、原子的社會の外觀は最も顯著である。資本制生産に移行するや、その典型的形態たる大工業に於いては、生産手段の尨大化、社會化に依り生産手段の私有は勞働と切離され、賃勞働者の群は工場に詰め込まれて軍隊的に編成され、各企業の内部にあつては社會化され計畫化された共同勞働が支配してゐる、だが此場合にも眼を企業の内部より社會全體に移すときには、原子的社會の外觀は依然として存する。

此原子的社會の外觀は、スミスやリカアドオをして彼等の經濟學にロビンソン物語を導入せしめた根據であるが、然しこの『個別化された個人の立場を創造せる時代こそ、正に、今までのうちで最も發達せる社會的（この立場より云へば一般的）關係の時代である。人間は最も言葉通りの意味において Zoon Politikon（社會的動物）である、たゞに社會的動物であるのみならず、社會においてのみ個別化し得る動物である。社會の外部における孤立せる個人の生産といふことは――それは稀には文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのであるが、かゝる文明人は既に諸々の社會力を能動的に有してゐる――共に生活し共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく、一の背理である。』（旁點雜者―註五）故に吾人は商品生産の斯かる外觀に迷はされず、一見相互無聯絡に見へる私的生産の間に、彼等を聯結して統一的社會生産を作り上げる紐帶を見出さねばならぬ。

商品生産が一個の社會的生産である限り、社會的生産の不可欠の前提たる彼の自然法則も何等かの仕方でこれを貫かねばならぬ。然らば（一）個人的勞働の社會的勞働への轉化（二）社會的總勞働の社會的欲望に向つての比例的配分（三）個人的勞働の社會的平等勞働への還元は如何にして行はれるか。商品生産に於いては各人は私的勞働を營むのであるから、彼等の個人的勞働は直接そのまゝで、社會的勞働を構成してゐる譯ではない。此社會の生産組織は自然生的に偶然的なものであるから、勞働の比例的配分を行ふ意識的統制者が存せざることは云ふまでもない。從つて吾人は前記の三要件が人間の意識より獨立した何等かの媒介を通じて充たされつゝあることを知る。ところで私的生産を聯結する社會的紐帶が見出されるならば、此媒介者は其紐帶の中に伏在せねばならぬ。故に社會的紐帶の發見は同時に斯かる自然法則の歷史形態を見出す所以である。然らば私的生産者を貫き結ぶ社會的紐帶とは何であるか、勞働生産物の交換關係これである。私的生産者は己れの勞働生産物を交換することにより、初めて社會的接觸を取り結ぶのであるから、商品生産社會に於ける生産諸關係――人と人とが生産に於いて相互に入り込む社會的聯絡――は、勞働生産物の交換關係――物と物との社會的關係――を通じて初めて構成される譯である。

私的生産者を聯結する社會的紐帶が、勞働生産物の交換關係の背後に潜む以上、自然法則も亦此關係を通じて貫徹されねばならない。私的勞働を社會的勞働へ轉化せしめ、同時に個人的勞働の社會的平等勞働への還元をなさしめる媒介者も、勞働の比例的配分を規制する統制者も、共に此物的關係のうちに伏在する。

斯くの如く物的關係の背後に人間の社會關係が藏されてゐると云ふ點に、商品生産諸關係の本質的特徴が存し、商品の物神崇拜的性質の客觀的根據が存する。人的聯絡を作らんが爲めに、物と物とが社會的關係を結ぶに到るの

であるから、商品生産社會に於いては勞働生産物は吾人の目に觸れ得る感覺的・自然的性質の外に、超感覺的な・神秘な・社會的性質を兼ね備ふる「商品」となるのである。彼の價値形態とは、勞働生産物が採る此社會形態に外ならず、それは商品生産者の社會的關係の物的表現であり、自然法則が此社會に於いて採る特殊な歴史形態に外ならぬのである。從つて、價値形態のうちにこそ、物神崇拜の神秘は潜み、資本制生産の歴史的特質は存する。故にマルクスは云ふ『商品の神秘的な性質は、その使用價値から生ずるのではない。それはまた同樣に、價値を規定するものゝ内容から生ずるのでもない。……しからば、勞働生産物が價値形態をとるや否や發生するところの、かの謎的性質は何處からか？　明らかにかゝる形態そのものから。』（註六）現社會の歴史性を看取し得ぬものにとつては、商品の物神崇拜的性質は解明されない。蓋し、これこそ、商品生産の歴史的特質より生ずるものであるからである。同樣に、經濟學の對象を人と人との關係即ち社會的生産諸關係におかぬものにとつては、商品の物神崇拜的性質はあくまでも神秘である。蓋し、夫れは物と物との關係に隱れた人と人との關係に外ならぬからである。商品の物神崇拜的性質を解明し得ざるものにとつては、勞働生産物の價値形態は問題となり得ず、勞働生産物の價値形態を解明せぬものには、勞働と價値との必然的關聯は理解出來ぬのである。故に、資本制生産諸關係の物的外皮それ自身を『社會的生産の永久的自然形態だと見誤』つてゐた古典派經濟學は、價値の内容は見出し得たが其形態を發見し得ず、此内容が何故に彼の形態に現はれるか、彼の形態が何故に此内容を持つか、換言すれば勞働と價値との必然的關聯の問題を遂に解き得なかつたのである。マルクスが此價値論の中心問題を解明し得た所以は、彼れが價値論を解かんとして商品を分析したのではなく、資本制生産諸關係の歴史的社會形態を解かんとして商品を分析するに到れる彼れの特異なる問題提起の仕方に存するのである。（註七）

註五　Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung. S. XIV. 河上、宮川譯序説五頁

註六　Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 35-6. 河上、宮川譯（岩波文庫）一〇五―六頁

註七　ヒルファーディングは斯かるマルクス特有の問題提起の仕方の重要意義を強調し、生産關係を永久的自然形態に於けるものとして前提するリカアドオの體系とマルクスのそれとの對立點をこの問題提起の特質に求めてゐる。（Vlg. R. Hilferding, Zur Problemstellunge der theoretischen Ökonomie bei Karl Marx. Die Neue Zeit, 23. Jahrg. I. Bd. S. 101-112. 塚本三吉譯勞働價値説の擁護（改造文庫）參照

三

かくて商品生産社會の内的聯絡が伏在すべき所は見出された。それは勞働生産物の交換關係である。彼の自然法則の貫徹すべき歴史的形態も見出された。それは勞働生産物の價値形態である。自然法則の三要件が如何にして此關係を通じて貫徹せられるか、その特殊な現象の仕方を以下に於いて考察しよう。

先づ個人的勞働の社會的勞働への轉化であるが、これは商品生産にあつては統制經濟に於けるが如く直接的には行はれず、生産物の交換を媒介として初めて行はれる。即ち私的生産者の生産物は交換關係を通じて他の凡ゆる生産物と社會的關係を結び、かくすることにより自己に體化された私的勞働を他の總ての私的勞働との社會的接觸に導き社會的分業の一肢體たらしめるのである。

『諸々の私的勞働は、交換が諸々の勞働生産物の間に・そしてそれを媒介として生産者たちの間に・樹立するところの關係によつて、始めて事實上、社會的總勞働の肢體たる實を示めす。』（註八）

商品生産の發展に伴ひ商品の社會的關係は擴大して、遂ひにそれは全面的交換可能の姿を取るに到る（註九）。か

ゝる商品の發展は商品生産に於ける社會的分業の發展であると共に、私的勞働相互の社會的接觸の擴大を意味する。私的勞働の社會的勞働への轉化が勞働生産物の交換關係を通じて行はれると云ふ點に商品生産社會の私的勞働のもつ特殊な社會的性質が存するのである。

私的勞働を社會的勞働に轉化する此過程は、同時に個人的勞働を社會的平等勞働へ『社會的に比較されうる容積』へ還元する過程である。交換關係に於いて商品は相互に一定比率の量的關係に入り込み、且つその量的比率で交換せられる。然るに量的比較は質的統一を前提とする。『もし吾々が對象界を考察するに際して量の諸規定を以つて行ふならば、このやうな考察の目標として吾々が目前に有するものは實際常に質量なのである。』（註一〇）一定の質を根柢とせざる量は單なる抽象であつて、現實的には考へ得られぬ。故に二物が量的に比較せられる場合、二つの量は必ず何等かの質を根柢とするが故に、この質の統一がなされずんば比較は成立せぬのである。質的統一と同時に同一單位量への還元が量的比較の不可缺的前提である。何人かゞ「一定量の鐵と一定量の小麥とが相等しい」と云ふとき、誰もこの表現には滿足しないで次の如く問ひ返へすであらう。「一體、その鐵と小麥とはどの點で等しいのか、目方でか、大きさでか、それとも値段でか」と。此問答は明らかに質的統一が量的比較に先行せねばならぬことを物語つてゐる。故にマルクスは價値關係を取扱ふ場合に次の如く注意してゐる。

『一商品の簡單なる價値表現が二つの商品の價値關係のうちに如何に隱れてゐるかを發見するためには、吾々は先づ、この價値關係をその量的方面から全く獨立に考察しなければならぬ。しかるに人々は大抵これと正反對の遣り方をして、價値關係のうちにたゞ、二種の商品の一定分量がそれにおいて等しとせらるゝ、比例のみ見る。人々の看過するところは、異れる物の大きさは、それらが同一單位に還元された後、始めて量的に比較されうるものとなるといふことである。同一單位の表現としてのみ、異れる物の大きさは、同じ稱呼をもつた・從つて同じ單位で測られうる・大きさなのである』。（註一一）

人々は、交換に際して質の違つた二商品を量的比例におくことにより、意識すると否とにかゝはらず兩者を價値と云ふ統一的質に還元し、彼等の勞働の質的差異を捨象して抽象的人間勞働に還元してゐるのである。而もたゞ、抽象的人間勞働と云ふ同質に還元するのみならず、『現存の・社會的に正常的な・生産諸條件と、勞働の熟練および强度の社會的平均程度とをもつてなんらかの使用價値を生産するに必要な勞働時間』（註一二）換言すれば『社會的必要勞働時間』と云ふ『社會的に比較されうる容積』または單位に還元するのである。斯くして初めて個人的勞働は量的比較可能なる同一質量・社會的平等勞働となるのである。これが商品生産社會に於ける個人的勞働の社會的平等勞働への還元の特殊形態である。（註一三）

『かくて人間は、彼等の勞働生産物が等質なる人間勞働の單なる物的外皮と看做さるゝが故に、それらの物を價値として相互に關係せしむるのではない。逆である。彼等は彼等の異種類の生産物を相互に交換において價値として平等視することにより、彼等の種々なる勞働を相互に人間勞働として平等視するのである。彼等はそのことを意識してはゐない、しかし彼等はかく行ふ』（註一四）

註　八　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 37. 河上、宮川譯一〇八頁

註　九　かゝる商品の社會關係の發展過程は價値形態の發展過程に外ならない。『簡單なる・單一なる・または偶然的なる・價値形態』より初まり『總體的の・または擴大されたる・價値形態』を經て、『一般的價値形態』、遂には彼の『爛熟たる貨幣貨態』にまで到る發展がそれである。『貨幣形態』は商品の全面的交換可能の形態であるが、而も商品のかゝる豐熟が現實となるのは、貨幣が資本に轉化した場合、即ち單純商品生産より資本制生産への移行が行はれた場

合に限られる。價値形態の發展に關しては詳細を資本論第一卷第一篇第一章三に讓る。

註一〇　Hegel, System der Philosophie, I. Die Logik. Sämtliche. Werke. herausg. V. Glockner. Bd. 8. S. 252. 速水敬二譯哲學大系第一部論理學二六七頁

註一一　Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 16. 河上、宮川譯（岩波文庫）六四頁

註一二　Marx, a. a. O. S. 7. 前掲書四五頁

註一三　勞働の質差の捨象、社會的平均勞働への還元が現實となるためには資本制生産の一定の發展段階を前提とする。質差の捨象せられた勞働、即ち『勞働一般』は『個人が容易に一の勞働から他の勞働に移りゆくところの、そして勞働の一定種類が個人にとつて偶然であり從つて無關心であるところの、一の社會形態に相應するものである』（Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung. S. XL. 河上、宮川譯序說四二頁）一作業が個人に結合してその特殊性に成長することを止めるのは、機械に基く大工業に於いて初めて見られるところである。さらに、社會的平均勞働が個々の生産者にとつて現實となるためには、マニュファクチュア初期に於ける程度の勞働集團の擴大を前提とする（社會全體にとつてならば、勿論ツンフト的手工業の時代に於いても既に社會的必要勞働は現實となつてゐた）。また商品の生産には社會的必要勞働時間を支出すべしと云ふことは、競爭の外部的强制が命ずるものゝ如く見えるが、マニュファクチュア分業の發展に伴ひ、與へられた勞働時間に一定量の生産物を供給することは、生産行程それ自身の技術的法則となる。（Vgl. Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 270 272. 292. 高畠譯第一卷一、三〇一—三頁、三二五六頁）

註一四　Marx, a. a. O. S. 37-8. 河上、宮川譯（岩波文庫）一〇九頁

四

以上に於いて、吾人は私的勞働の社會的勞働への轉化、並びに個人的勞働の社會的平等勞働への還元が、商品交換を媒介として如何なる仕方で行はれるかを考察した。而して此轉化、還元は社會的總勞働の比例的配分の前提である。然らば、社會的總勞働の比例的配分は交換關係を通じて如何に行はれるか、此問題は價値法則の統制作用が此無統制社會を如何にして統制するかの問題であり、クーゲルマン宛マルクスの書簡に於ける暗示的叙述の中心點である。

『社會的勞働の聯絡が個人的な勞働生産物の私的交換として行はれてゐるやうな社會狀態のもとで、勞働のかゝる比例的配分が自らを貫徹するその形態は、正にこれら生産物の交換價値である。……ブルジョア社會の本質は、生産の意識的な・社會的な・統制が先天的には決して行はれないといふことのうちに、正に成り立つ。合理的なもの及び自然必然的なものは、盲目的に作用する平均としてのみ自らを貫徹する。』（註一五）以下に於ては、此暗示的叙述の中心問題を展開せんとするのである。（註一六）

註一五　Marx, Briefe an Kugelmann, S. 54. (Elementar Bücher des Kommunismus)

註一六　マルクス『哲學の貧困』の序文に於いてエンゲルスは吾人が玆に問題とするところを極めて簡潔に論じてゐる。頗る教示に富めるもの故それを參照せられたい。（マルクス、淺野晃譯『哲學の貧困』—マルキシズム叢書第二册—序二六—三一頁參照）

商品生産社會に於いては社會的欲望は裸の儘で現はれず、購買力を前提とする有效需要として現象する。他方、社會的總勞働の配分は利得を追求する商品供給として現はれる。需要供給の調和の實現こそ、今日の歷史形態に於ける勞働の比例的配分の實現に外ならぬ。更らに、社會的必要勞働量（技術的）は價値量として、平均的社會效用

（註一七）は價格の高さに一致するものとして現はれる。

商品生産社會には勞働の比例的配分を行ひ生産を統制する意識的統制者は無く、私的生産者は各自勝手に生産を行つてゐるのに、『兎にも角にも結局のところ需要は滿足せられ、一般的に見て生産は終局に於いては需要せらるゝところの目的物に向けられる。如何にしてかゝる矛盾の調和が實現されるのであるか。競爭に依つてゞある。』（註一八）需給關係・競爭は價格を動搖せしめる。需要側の競爭は價格を引き上げ、供給側の競爭は價格を引き下げ、兩者間の競爭は、その內輪の撲合の强弱に依つて、前者に於けるそれがより强い時は價格を引き上げ、後者に於けるそれがより强い時は價格を引き下げる（註一九）。換言すれば、供給が需要に比し大なる時は、供給側の撲合が需要のそれよりも强いのであるから價格は引き下げられ、反對の場合は、逆の理由で價格は引き上げられる。然るに價格の騰落は、反對に需給を動搖せしめる。蓋し、價格の騰落は直ちに需要の有效となる限界に變動を生ぜしむると同時に、供給側の損得に影響するからである。供給が過剩となるや、價格は下り、價格の下落は需要の增加、供給の減少を惹起して需給の調和を實現せしめる。かくして、需要、供給、價格の三者間には競爭に基づく相互作用が存し、一見、需給の一致はこの相互作用より獨立せる他の者の規制なくして實現せられるものゝ如くである。一例を考察して見よう。

此處に一定の價格があり、その價格に於ける需要供給は一致して居り、この均衡は安定的であるとする。然るに何等かの事情で供給が增したとすれば價格は低落する。價格が低落すれば需要が增大して價格低落を食ひ止める作用を起す。だが供給が以前よりも增してゐるのであるから、以前よりも低い點で價格は一時安定し、この價格に於いて需給も一時的均衡をうる。だが供給はそのまゝでは居られない。蓋し豫定せる賣値より現實の價格が下つてゐるから、豫定利得の減少せるもの或は損失をさへ蒙れるものが生じ、かゝるものは供給減少の原因となるからである。供給が減ずるに從ひ價格は騰貴し來り、この騰貴は價格が從前の點に復歸するまでは止まぬ。この從前の點に於ける需給の均衡は一時的ではなく安定的均衡である。

何故に、或る價格に於いては需給は安定的均衡を得、他の價格に於いては不安定的・一時的均衡を得るに止まるのか。競爭は、如何にして價格が安定的なる點を離れるか、または如何にしてそれが結局、安定的な點に歸つて來るかを說明するが、安定的な點とは一體何であるかを說明することは出來ない（註二〇）。此說明をなす爲めには、吾人はこの相互關係より獨立した究極的規制者に眼を轉ぜねばならぬ。

註一七　三田學會雜誌昭和七・三所載拙稿『勞働價値說の基本的考察』九九―一〇二頁參照

註一八　マルクス、淺野晃譯『哲學の貧困』序二七頁

註一九　Marx, Lohnarbeit und Kapital. S. 22-3 (Elementar Bücher des Kommunismus) 河上譯（岩波文庫三八―九頁）

註二〇　『需要と供給との不均衡、及びそれに伴ふ市場價格と市場價値との不一致を認めるのよりも容易なことはない。本當の困難は需要供給の均衡とは何かといふことを決定する點にある…。需要供給は、それが相互的均衡に歸した時作用しなくなる。さればこそ、この場合、商品はその市場價値通りに販賣されるのである。二つの力が相反した方向に均等に作用するとき、兩者は互ひに止揚し合つて外部へは何等の影響を及ぼさなくなる。そこで、此條件の下で生ずる諸現象は、此等の二つの力の干涉といふことと以外の方面から說明すべきである。需要供給は、それが相互に止揚し合つたとき、もはや何ものをも說明しなくなる。それはもはや、市場價値の上には影響しなくなる。市場價値は何故、或る一定の貨幣額によつてのみ云ひ現はされ他の貨幣額に依つては云ひ現はされないか、我々はこの問題についていよ〳〵五里霧中に陷る。

資本制生産の現實的な内部諸法則は需要供給の相互作用を以つてしては說明し得ないことは明らかである。…蓋し、此等の諸法則は、需要供給が作用しなくなつたとき、玆に初めて純粹に實現されたものとして現はれるからである。需要供給は實際、相互均衡に歸することがない。又は歸することがあつても、それは偶然的なことである。それ故、需要供給は、科學的には零に等しいものとして、行はれざるものとして、考ふべきである。』（旁點筆者）

（Marx, Das Kapital, Bd. III. S. 152-3. 高畠譯第三卷上一五七頁）

上揭引用文に於ける需給の均衡とは云ふまでもなく安定的均衡を意味する。需給關係・競爭は商品生産社會が無統制なるが故に起る表面的事象に過ぎない。かゝる現象の背後にあつて、社會的生産を貫く秩序たる、彼の自然法則は『盲目的に作用する平均』として、需給の動搖が繰り出す均衡の現實的傾向として貫徹する。換言すれば、需給が動搖しつゝも均衡に歸せんとする傾向・價格變動が結局或る點に歸せんとする偏倚は究極的規制者たる自然法則に依つてのみ說明されるのである。故に安定的均衡が此點であつて何故彼の點でないかの說明は、需給關係の中には求められず、その外部のものに求められねばならない。從つて需給の均衡狀態それ自體に關しては需給は何等の說明力もなく、無作用である。

需給均衡無作用論に關してはマルクス批評家の間に反對がある。ボェームバヴェルクは（一）需給の一致は如何なる市場價格に於いてもありうる。（二）マルクスも認める如く需要供給は伸縮し得る可變量であつて、有效な需給も排除された需給も共に價格の決定に參加するものであるから、市場に現實に現はれる一部的需給の均衡より無作用論を立てるのは誤つてゐる。（三）二つの力の作用があればこそ均衡も存し得るのであつて、これを無作用となし外部に說明を求むることは誤謬も甚だしい、と述べてゐる。（Böhm-Bawerks Kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins S. 409-13.）

小泉教授は（一）マルクスが需給の均衡を論ずる場合彼れは價格を前提することを忘れてゐる、（二）需給の均衡は如何なる價格に於いても起り得る、（三）價格は常に需給關係により決定されるものであるが、自然價格に一致せぬ價格はそれ自體のうちに變動の原因を藏し、一致する價格はこれを藏さぬと云ふに止まる、等の諸點より論難せられてゐる。（小泉信三『價値論と社會主義』四たび勞働費用と平均利潤の問題を論ず、十六節參照）

マルクスの問題とする均衡は、其都度の斷り書きこそないが、前述せるところより、自然法則が純粹に實現する姿である以上、價値に一致した價格（資本制的モディフィケーションを導入せし場合ならば、生産價格に一致せる價格）を前提とする安定的均衡である事は言ふまでも無い。故に價格を前提とせぬ均衡でもなければ（マルクスは價格と需要及び供給、三者間の相互作用を充分認めてゐる——Marx, Das Kapital, Bd. III. I. S. 153-4. 高畠譯第三卷上一五八—九頁）如何なる價格にても生じうる均衡でもないのである。更らに價格それ自體のうちに變動原因が存するか否かは需給に依つては決して說明され得ぬところであつて、需給及び價格の三者以外のものに求めざるを得ないのである。蓋し安定的均衡の最後の基準は價値だからである。換言すれば價値は三者の相互關係より獨立して決定され、むしろ逆に相互關係を規制するものだからである。需給無作用の理論も玆に其根據を持つ。最後に、マルクスが資本論冒頭の商品分析に於いて、何故需給の作用を捨象してゐるのか、の疑問も、商品生産社會を貫く上述の自然法則それ自體を剔出して論ぜんとせる彼れの意圖を了解すれば一應氷解するのである。『經濟學上需要供給が均衡に歸すると假定するのは、何故であるか？　曰く、諸現象をば、その合法則的な、その概念に一致した姿で觀察せんがためである。換言すればこれを需要供給の運動に依つて與へられたる外觀からは獨立して觀察せんがためである。他方にまた、需要供給の運動の現實的傾向を見出して、謂はゞこれを見定めんとすることも、その理由となつてゐる。蓋し、需要供給間の諸不等は對抗的性質のものである。而してそれは

不斷に相伴ふものであるから、その相反した方向に依つて、その對抗に依つて、相互均衡に歸する。それ故、與へられたる如何なる場合に於いても、需要供給は均衡に歸してゐるものではないが、一の方向に於ける不一致は、それと相反した方向に於ける他の不一致を喚び起すことになるから、大なり小なりの一期間全體について考へるならば、兩者は絶えず均衡に歸する。尤も、これは過ぎ去つた運動の均衡としてのみ、相互對抗の不斷の運動としてのみ、行はれることなのである。これに依つて、市場價値に一致せざる市場價格は過不足相殺され、平均數について考へるならば、それは市場價値に等しくなる。なぜならば、市場價値に對する各不一致はプラス・マイナスとして相殺されるからである。云々』（旁點筆者）（Marx, Das Kapital, Bd. III. I. S. 153 高畠譯第三卷上一五七—八頁）

或る價格に於いて需給が安定的均衡を得るのは、供給側が其價格に於いて得られる利得に甘んじてゐるからであり、過大でも過少でもない普通の利得が供給者に保證されてゐるからである。生産價格化を捨象した現在に於いてはかゝる價格は價値量——社會的必要勞働時間（技術的）——に一致した價格に外ならない。蓋し、價値よりの價格の離反は、利得を過大または過少ならしむることにより供給を刺戟して供給量を變動せしむるからである。即ち、價値のバロメーターに依り價格の背離が指示されてゐる限り、需給の變動は止まず、需給の變動は價格を動かして價値に一致せしむる作用をなすのである。かくて需給及び價格の相互關係は價値なる客觀的基準に依つて規制せられ、その結果、價格動搖は常に價値に落ち付かんとする傾向をもつ。此場合、需要、供給、價格、三者の相互關係より價値は獨立してゐる。蓋し價値は社會的生産力の一定の發展段階により規定さるゝものだからである。而してかくして定められた價値こそ三者の相互關係の究極的規制者である。價格が價値に一致せんとする傾向を持つと云ふ事は、需給が安定的均衡を得る傾向の存する事を意味し、從つて勞働の比例的配分の傾向を意味するものに外ならない。商品生産を貫く內部的法則・自然必然的なるものは『需絲が相互均衡に歸したとき、茲に初めて純粹に實現されたものとして現はれる。』然し乍ら、現實に於いては、如何なる場合にも需給は均衡に歸してゐるものではないが、その運動の對抗的性質により、『一の方向に於ける不一致は、それと相反した方向に於ける不一致を喚び起すこと』により、均衡すべき現實的傾向を持つものであるから、『大なり小なりの一期間全體について考へるならば兩者は絶へず均衡に歸する』のである。これが、商品生産社會に於ける自然法則の特殊な現象の仕方である。『合理的なもの及び自然必然的なるものは、盲目的に作用する平均としてのみ自らを貫徹する』とのクーゲルマン宛書簡に於けるマルクスの言葉の眞意も亦茲に存するものと云はねばならぬ。

五

上述の問題を前回拙稿に於いて展開した勞働配分の法則を想起しつつ更に詳細に考察して見よう。而して此考察は、從來屢々論ぜられたる『社會的必要勞働時間』の二義の問題に解決を與へ得るものであると信ずる。マルクスは『社會的必要勞働時間』なる言葉を、（一）一般的には、商品一個當りの技術的必要勞働時間（勿論社會的平均に於ける）の意味に用ひ、（二）特殊の場合には、一生産部門全體に對する社會的欲望の範圍——『社會的自乘に於ける使用價値』（註二）——に從つて、該部門に必要とされる需要的必要勞働時間の意味に用ひてゐるのである。

資本論第一卷第一篇第三章に於いて、マルクスは商品の第一變態——販賣——を說くに際して次の如く論じてゐる。意識的統制なき今日の社會では私的生産者は、己れの生産物が絶對的に不必要なものであるか、必要であるとしても過剩供給の爲めに相對的に不必要となれるものであるか、此點に關しては全く無知である。

『もしも市場の胃の腑がリンネルの總量を、一エルレにつき二シルリングといふ正常價格で吸收することができないならば、この事實は、社會的總勞働時間の餘りに大なる部分がリンネル機織の形式において支出されたことを、證明する、その結果は、個々のリンネル織工のいづれもが、彼れの個別的生産物の上に、社會的に必要な勞働時間以上のものを費したのと、同一である。こゝでは Mitgefangen, mitgehangen.〔一緒に捕へられたものは一緒に絞殺される〕といふ諺があてはまる。市場における總てのリンネルはたゞ一個の商品と看做され、その各片はたゞその可除部分とのみ看做される、そして實際また、個々の一エルレの價値はいづれもみな、社會的に規定されたる同一の分量を有つた一樣なる人間勞働の體化物に外ならぬのである。』（旁點筆者―註二二）

此説明に於いて先づ起る疑問は、價値量を決定するものは、技術的必要勞働時間なのか、需要的必要勞働時間なのか、その何れであるかと云ふことである。前後の關聯より解釋すれば、最後の旁點の文句は、價値は『社會的自乘に於ける使用價値』に依つて決定せられる・需要的意味に於ける社會的必要勞働總量の可除部分に外ならぬ、とのことを意味するもののやうにとれる。だがかく解することは、小泉教授及び櫛田氏なども云はれるやうに（註二三）マルクス勞働價値説の自殺を意味する。蓋し、こうなると、價格が價値を規定する事となり、價値の價格規制作用は全く説明がつかなくなると同時に、マルクス勞働價値説は逆立ちすることゝなるからである。

此疑問は勞働配分の統制者としての役割より價値法則を考察する時には一應氷解するものと思はれる。マルクスは資本論第三卷地代論の緒論に於いてこの問題を取扱ひ大要次ぎの如く述べてゐる（註二四）。・勞働の配分が均衡を得てゐる時には價格は價値（更らに進んだ發達の下に於いては生産價格）に一致すると云ふ法則は、「個々の商品について、はなく、分業に依つて獨立化した特殊な社會的生産諸部面のその時々の總生産物について、自己を貫徹する價値法則なのである』が、此場合各個の商品について技術的に必要な勞働時間が充用されるといふのみでなく、『尙また社會的總勞働時間中からの必要な比例量のみが色々な職業群に於いて充用されるといふこと』即ち第二の需要の意味に於ける社會的必要勞働量が問題となる。だが『法則は依然として個別的商品の場合に示したところのものと同一である。即ち、商品の使用價値は交換價値隨つてまた價値の前提たるものだといふ法則これである。この問題が必要勞働と餘剩勞働との割合に關係して來るのは、若しその割合が破られるとすれば、商品價値に含まれる餘剩價値が實現せられ得なくなるといふ限りに於いてのみである。』

かく述べることに依りマルクスは勞働配分の問題より需要の意味に於ける社會的必要勞働時間を取扱ひ、この『價値法則一般を更らに展開』した場合に於いても個別的商品の場合と原則は同じであり、使用價値は飽くまでも價値の前提たるに止まることを强調する。換言すれば、價値の創出に關るものは技術的必要勞働時間であつて、需要的必要勞働時間はたゞ價値實現の前提たるに止まる。この原則だけで問題の核心は既に把まれてゐる。

商品生産社會は無政府的なるが故に、社會的欲望の範圍と配分勞働量との間には意識的な必然的關聯は存在しない。即ち一生産部門に投ぜられたる技術的必要勞働總量と該部門に於ける需要的必要勞働量とは必ずしも一致せぬのである。然るに現實の勞働配分は、兎にも角にも終局的には何等かの仕組に依つて、社會的欲望の範圍――需要的必要勞働量――に一致せねばならない。この「何等かの仕組」とは價値法則の統制作用に外ならない。筆者は前回に於いて、マルクスの用ふる使用價値なる言葉の二義について論及した（註二五）が、（一）資本論冒頭の商品分析に於いて規定せられた『使用價値』は絶對的の必要・不必要に關するのみで、過剩・過少の相對的な場合には無關係であり、社會的分業の質的編制にのみかゝはるものであるが、（二）特殊な場合に使用せられる『社會的自乘に於け

る使用價値』は相對的の必要・不必要、過剩・過少の問題に關するものであつて、社會的分業の量的編制に關するものであると云ひ得る。而して、兩者は何れも價値の前提たるに止まるが、前者は價値の創出に對しての前提であり、後者は價値實現に關する前提たるに過ぎない。絶對的に無用なものは如何に勞働を投ぜられてゐようとも價値たり得ないが、有用にして而も過剩のために相對的に無用となつたものは、價値たりうるがその實現をなし得ぬのである。從つて、後者に依りその範圍を決定せられる需要的必要勞働量もまた價値實現の前提たるに止まる。

價格は價値の實現範圍を示す。故に、價格總量は需要的必要勞働量の範圍に規制せられ、一個當りの價格は、かゝる需要的必要勞働量の一個當りの可除部分に相當する。然るに需要的必要勞働量の範圍は『社會的自乘に於ける使用價値』により決定されるものであるから、これの可除部分とは結局該生産物の社會的效用總量の可除部分・平均的社會效用に一致するものである。故に一個當りの價格は平均的社會效用に依り規定されると云ふことになる。價値と價格との背離とは、一個當りの技術的必要勞働時間と平均的社會效用——從つて需要的必要勞働量——との不均衡に外ならず、これは創出せられた價値量と實現せられる價値量との開き・勞働の現實的配分量と社會的欲望範圍との不一致を意味し、從つて勞働配分の誤りを意味する。前回拙稿に於いて、勞働配分の均衡・不均衡の規準は技術的必要勞働量と平均的社會效用との均衡・不均衡に存し、平均的社會效用の可動的なるに反し、技術的必要勞働量は確固不動のものであるが故に、これこそ究極的規制者であると述べたが、以上述べ來れるところに依り、吾人は、商品生産社會に於いては價値と價格とが此の兩者の關係を現はすものであり、價値こそ究極的バロメータなることを知るのである。

價格動搖は價値の規制に依り、平均的には價値に一致する傾向をもつが故に、價値の創出と實現の開き、現實的勞働配分量と社會的欲望との不一致、即ち勞働配分の誤りは常に存しつゝも無くなるべき傾向をもつのである。かくして、資本制社會に於いては、勞働の均衡的配分が既に構成されてゐるのではなく、常に構成され行く過程が存するのみである。換言すれば、絶へず生ずる勞働配分の仕損じを通じてのみ、今日の社會に於ける勞働配分の均衡は得られる。これが資本制社會に於て勞働配分の自然法則が貫徹する歴史的形態である。而して斯かる仕損じは、社會的勞働の浪費——最大效果を生むべき用途に用ひられざりしこと——を意味し、創出せられし價値にして實現されざる部分はこの浪費量を示す。かゝる浪費は人爲的統制なき今日の社會が自動的統制の爲めに支拂ふ對價に外ならず、商品生産社會の生産諸關係の特質に歸因するものに外ならぬ。

以上の事柄は、價値量を技術的必要勞働時間と解してのみ理解されるところである。若しも價値を以つて、需要的必要勞働時間なりとする時には、價値は價格に常に一致することゝなつて、それは何等の統制作用をもなし得なくなり、從つて商品生産諸關係を貫くべき勞働の比例的配分の秩序は失はれることゝなる。故にマルクスが技術的必要勞働時間を以て價値量となし、需要的必要勞働時間を價値實現の前提となせしは、かゝる商品生産諸關係の特質より價値概念を考察する場合にのみ承認され得る事柄である。『一定の商品が當時の社會的欲望以上の或る數量で生産されるとすれば、社會的勞働時間の一部は浪費されることになる。で、この場合には斯かる商品の總量は現實に於いてそのうちに含まれてゐるところよりも遙かに少量な社會的勞働を市場で代表する（Repräsentiert）』（註二六）。この一文に於ける『代表する』と云ふ言葉の意味も、『その結果は、個々のリンネル織工のいづれもが、彼れの個別的生産物の上に、社會的に必要な勞働時間以上のものを費したのと、同一である。』（前掲引用文）（何れも傍點筆者）との文句の意味するところも、何れも價値の實現を取扱へるものに外ならない。高田教授は、マルクスが使用價値

を單なる前提たらしむるに止まり、これを暗黑のうちに押し込めて其作用を探り出さないと非難されるが、以上に於いて吾人は、マルクスは決して使用價値に不當な地位を與へるものではなく、それに相當する地位を與へたものであることを知るのである（註二七）。

註二一　三田學會雜誌昭和七・三所載拙稿「勞働價値說の基本的考察」九九―一〇二頁

註二二　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 67-8. 河上、宮川譯（岩波文庫）一七一頁

註二三　小泉信三『價値論と社會主義』四たび勞働費用と平均利潤との問題を論ず　四六三頁
　　櫛田民藏『マルクス價値概念に關する一考察』大原社會問題研究第三卷第一號

註二四　Vgl. Marx, a. a. O. Bd. III. 2. S. 155-6.　高畠譯第三卷下一七五―六頁

註二五　拙稿前揭　九九―一〇二頁參照

註二六　Marx, a. a. O. Bd. III. I. S. 150.　高畠譯第三卷上二五五頁

註二七　『所謂自然法則が平均として自己を貫くのは、即ち均衡の傾向が支配するのには、常に使用價値又は效用の作用がはたらいてゐる。これらの作用を明確ならしめずしては均衡の何たるかを明らかにすることは出來ぬ。マルクス勞働價値說は此使用價値をたゞ前提とするのみ、これを暗黑の中に推しこめて、その作用を探り出さない。』（高田保馬『勞働價値說は支持し得らるゝや』（改造昭和五・七）
　　マルクスの勞働配分法則に於いて效用が問題となることは確かであり、『社會的自乘に於ける使用價値』なる言葉を用ひてマルクスが此方面を假令漠然たりとは云へ問題としてゐることに就いては前回拙稿に於いて述べたところであるが、使用價値又は效用が單に價値の創出或は實現の前提たるに止まることも、勞働配分法則の上に立つてこそ初めて了解せられるのである。

六

さて吾人は以上に於て彼の自然法則が資本制社會に於いて取る歷史的形態としてのマルクス價値概念を展開して來たが、資本論冒頭の商品分析が斯かる觀點より理解さるべきことは云ふまでもない。冒頭商品分析の方法論的諸問題に蝟集されたマルクス批評家の論難點の多くも、前述せるマルクスの問題提起の仕方の特異性、從つて彼れの價値概念の特質の下に照し合せて考察する時、初めてその解答が得られるものと思はれる。即ち何故マルクスは商品分析を以つて彼れの經濟學を始めるのであるか、如何なる觀點より彼れは勞働生產物の價値形態を問題とするのであるか、この理解は冒頭商品分析の諸問題にとつて、その解決の爲めの缺く可からざる前提である。冒頭の商品分析を以つて既定の結論を論證せんが爲めの純形式的・後思案的な論理的操作となすが如き疑問（註二八）もかゝる前提の下に解き得られるのではあるまいか。以上述べ來れるところにより、吾人はこれら諸問題を取扱ふべき用意を有してゐる。以下、この用意の下に冒頭商品分析の諸問題に就いて能ふ限りの解釋を試みよう。

註二八　Vlg. Böhm-Bawerk, Zum Abschluss des marxschen Systems. III. (Kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins. III. Hauptabschnit)

小泉信三　價値論と社會主義參照

A

資本論冒頭の商品分析に於いて、マルクスは何故その對象を勞働生產物としての商品にのみ限つたのであらうか。ボーム・バヴェルクが、この限定を以て、既知の結論を導かんが爲めに豫め用意せられた方法論的カラクリとなして以來、この問題はマルクス批評家により常に採り上げられ、マルクスの方法論的缺陷の一つとして攻擊されて來

たのである（註二九）。

然し乍ら、マルクスの問題提起の特異性、資本論の出發點に置かれた商品分析の有つ意義を既に詳細に論究した吾人には此問題の解決は既に與へられてゐる筈である。

一見、物と物との關係に過ぎない商品交換が、社會的關係を對象とするマルクス經濟學に於いて問題とされ、而もそれの出發點にまでなされてゐる所以は、交換關係てふ物的關係が、畢竟商品生產者の社會的聯絡の物的外皮に外ならず、それを通じて彼等の私的勞働が相互に結ばれて社會的勞働となり、社會的平等勞働となり、更らに、これが社會的欲望に向つて比例的に配分されるといふこと、換言すれば、交換關係は社會的生產諸關係を貫く自然法則が今日の社會で採る歷史形態に外ならないといふこと、のうちに存する。商品交換の本質――その社會的意義も亦茲に存するものと云はねばならぬ。交換關係の意義をかゝる點に求め、かゝる觀點の下に、商品生產を貫く內在法則を求めて商品分析を行ふマルクスが、先づ勞働生產物としての商品を問題とせるは當然である。勞働生產物の交換關係は基礎的・支配的であつて、非勞働生產物の交換は派生的である。蓋し、彼れが對象として求めた、商品生產社會の內的聯絡、それを貫く自然法則は勞働生產物の社會關係の中にのみ見出されるからである。勞働生產物としての商品を理解せずんば商品生產社會の本質は理解されず、非勞働生產物としての商品も理解されない。而も、非勞働生產物としての商品を理解せずとも、前者は獨立に理解されうるのである。マルクス批判者が好んで例證する土地の價格についてこれを見るも、地價は地代を前提として始めて理解されるが、資本制的地代は資本を前提としてはじめて前述せる如く勞働生產物の商品形態に外ならない。故に、土地せずんば理解されず、資本の論理的・歷史的前提は前述せる如く勞働生產物の商品形態に外ならない。故に、土地の價格（土地には價値はないのであるから價格と云ふのも無理な表現であるが）は勞働生產物の價値形態の分析より得られた價値法則の展開を待つて始めて理解さるべきものである。

マルクスは、夙に、リカアドオ價値論に集中された諸批評中の此問題を採り上げて次の如く述べてゐる。『最後の、そして一見最も眞實らしい異論は、普通のやうに奇妙な實例の形式で提出さへしなければ、次の如くである。若し交換價値が或商品に含まるゝ勞働時間に外ならないならば、何等の勞働をも含まない商品は如何にして交換價値を有し得るか、換言すれば、何處から單なる自然力の交換價値は生ずるか？　この問題は地代論に於て解決せられる。』（註三〇）地代論に於ける彼れの解答を、略述すれば次の如くである。自然力は價値を生みうるか。否、自然力は、生產の不可缺の要件として、價値創出の前提ではあるが、價値創出の源泉ではない。それは價値創出の不可缺の前提であり、而も再生產され得ぬが故に、その占有はその使用を制限しうる力となり、このことによつて自然力を前提として創出された價値の一部を自己に分配せしむる力を持つに到るのである。從つて土地所有權は決して價値を生み出すものではなく、價値を地代と云ふ形態で歸屬せしむる要因たるに過ぎぬ。自然力は何等價値を有たぬ。併しその所有はかくして價値分配の原因となるが故に、地代の資本化によつて算出された幻想的價格をもつ。即ち、自然力の背後にある現實的な經濟關係が、かゝる價格を有たせるのである。

自然力は價値を生まず、またそれ自身價値でも無いといふ根本法則は以上展開し來れるマルクス價値概念よりして當然の歸結である。

註二九　Vlg. Böhm-B.werk. a. a. O. S. 384-8.

小泉信三『價値論と社會主義』二一二頁參照

高田保馬『勞働價値說は支持し得らるるや』（改造昭和五年七月）參照

註三〇　Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. 46. 河上、宮川譯　七一頁

B

次ぎに問題となる點はマルクスの等價交換の前提である。ボェーム・バヴェルクはこれを以つて『古い煩鎖哲學的神學的な理論』であるとなし、近代經濟學者はかゝる説の支持し難き事を一般に認めてゐる、蓋し等價物間にはかへつて交換は起らぬ、寧ろ均衡の破れる所、二物間に何等かの不等又は優劣の存する所にのみ交換は起りうる、と論じてゐる、註三一）。小泉教授は、資本論第一卷の等價交換の前提の下に立つ勞働價値説論證方法は第三卷平均利潤及び生産價格説とは全く相容れぬものであつて、第一卷商品分析に關するマルクシストの種々なる辯護的解釋は何れも此の矛盾の解釋たり得ないと批評せられる（註三二）。二木教授は等價交換の前提は無論證的であると難じ（註三三）、高田教授は交換比率が勢力關係により定まることを説いて、等價交換の前提の無論證にして、たゞの斷定にすぎざることを論じ、かゝる共通物を否認して而も交換比例の成立を説明するローザンヌ學派の功績に論及して居られる（註三四）。小泉教授の批評は生産價格の問題を中心とするが故に本節では觸れず、ローザンヌ學派の所説の吟味は筆者未だこれをなす素養を有たぬ。故に以下に於いては、ボェームの論點を中心として等價交換の前提を考察してみよう。

ボェームが等價なる場合には交換は起らず、不等價の場合、優劣の存する場合にのみ交換は行はれると云ふ時、彼れの意味する等價、不等價とは限界效用學派の立場より解釋されたものに外ならない。即ち、交換當事者が、己れの有するものと相手方の財貨との間に效用の不等を認めざる限り、換言すれば相手方の財貨により多くの效用を認めざる限り交換を行はぬと云ふ自明の理を物語るに過ぎない。主觀的效用の意味に於ける等價・不等價を問題とする限り、ボェームの云ふことは認むべきであり、マルクスとてもこれを否定するものではない。寧ろマルクスは交換の前提條件として交換さるゝ二商品の使用價値が質的に相違すべきこと、並びに生産者にとつては彼れの商品は非使用價値であり相手方にとつては使用價値たるべきことを擧げてゐる。若しさうでなければ生産者は彼れの商品を市場に持ち來たしはせぬからである。彼れにとつてそれが直接に使用價値を持つのは、交換價値の擔ひ手であり從つて交換手段であるからに過ぎぬ（註三五）。

マルクスはかく述べることによつて、寧ろボェームの意味するところを徹底せしめ自家用品の過剩を偶然的に交換に齎らす未發展の商品生産ではなく、初めから生産物を商品として生産する商品生産者を問題としてゐるのである。

此點は主觀的評價と價値との關係に關するマルクスの觀點に明らかに現はれる。マルクスにとつては、交換當事者の主觀的評價が交換比率の決定に參加したのは、單に商品交換の曙、即ち上記の過剩生産物を交換に齎す偶然的場合に限られる。かゝる偶然的場合には『それらの物は、これを相互に讓渡せんとする、その所有者の意志行爲によつて交換されうるのである。かくするうちに、他人の所有する使用對象に對する欲望が、次第に確立して來る。交換の絶えざる反覆はそれを一の規則正しき社會過程となす。だから時の經過につれて、勞働生産物の少くとも一部分は交換の目的に供することを豫定して生産されねばならなくなる。この瞬間から、一方においては、直接の欲望に應ずるための有用性と、交換のためのその物との有用性との分離が確立する。その使用價値はその交換價値から分離する。他方においては、それらの物の交換せらるゝ量的比率が、それらの物の生産自體に依存するやうになる。慣習はそれらの物を一定の價値の大きさたらしめる。』（旁點筆者・註三六）

マルクスが商品分析に於いて對象とせしものは、商品交換の初期に於ける偶然的な交換ではなく、交換が『一の規則正しき社會過程』となり、交換比率が當事者の主觀的意志行爲に依らず、生産それ自體により、人間の意識より獨立した社會的過程により、決定されるまでに發展した段階である。從つて、此場合には、需給作用による動搖は勿論存するが、交換比率は生産自體に依存する必然的な、規則正しき客觀的比例に歸するに到る。かゝる狀態の説明にはボェームの理論では間に合はなくなると共に、マルクスの理論がその意義を加へて來るのである。

價値は等價である、交換せられる二商品には共通物が存在せねばならぬ、蓋し量的比較は質的統一を前提とし、『異れる物の大きさは、それらが同一單位に還元された後、始めて量的に比較されうるものとなる』から、と云ふ論理は今まで幾度びか論及して來たところであるが、これは單なるスコラ哲學的誤謬でもなく、無論證的アプリオリでもなく、むしろマルクスが價値形態の觀察から得て來た、經驗的實證的前提に外ならない。

價値形態とは勞働生産物の社會形態であり、價値の內容の現象形態であるが、この現象形態こそそれを理解するものにとつては最も雄辯に價値の性質を物語つてゐるのである（註三七）。資本論冒頭の價値の實體及び大きさの分析も、單なる形式的、後思案的論證ではなく、價値形態の觀察により認識せられた價値の內容の叙述に過ぎない。

『一定の商品、例へば一クオーターの小麥は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金、約して云へば、種々樣々なる比例に於ける他の諸商品と交換される。されば小麥は、單一の交換價値のみを有するものではなく、多數の交換價値を有してゐるのである、然るに、x量の靴墨も、y量の絹も、z量の金なども、總べて皆一クォーターの小麥の交換價値であるから、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは交互に置き換へ得るところの、又は互にその大きさを等しうするところの交換價値であらねばならぬ。そこで第一に、斯ういふ結論が生じて來る。即ち、同じ一商品の有效なる各交換價値は、一の等一物を云ひ現はしてゐる。第二にまた、總じて交換價値なるものは、それ自身と區別し得る或內容の表象樣式即ち「現象形態」たりうるのみである。』（註三八）。この論證方法はマルクスが勝手に考へ出したものではなく、『擴大された價値形態』（註三九）――表式化すれば、1クォーターの小麥＝x量の靴墨　或は＝y量の絹　或は＝z量の金　等々――の物語るところを叙述したに過ぎない。『擴大されたる價値形態』においては一クォーターの小麥の價値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々といふが如き商品世界の他の無數の要素に表現されることにより、それがその現象形態たる無數の使用價値の特殊性よりは獨立した・而も無數の商品が等しく有するところの共通物、等一物たることを吾人に知らしめるのである。既述せる如く、價値形態の發展は『簡單なる・單一なる・また偶然的なる價値形態』『總體的の・または擴大されたる・價値形態』『一般的價値形態』『貨幣形態』の順序を採るものであるが、この發展は、その形態の背後に隱されたる價値の性質を、次第に完全に表現して行く過程である。最も完全に價値の性質について物語るものは貨幣形態であり、マルクスの商品分析もこれについてなされたものであるが、これは本質的には『一般的價値形態』に等しいものであるから、吾人は『一般的價値形態』（註四〇）の表現するところに從つて共通物の必然性を考察しよう。一般的價値形態を表式化すれば

u量の茶　＝
v量の珈琲　＝
w量の麻　＝
x量の靴墨　＝｛1クォータアの小麥（貨幣形態ならば、例へば2オンスの金）
y量の絹　＝

$$\left.\begin{array}{l} z\text{量商品 A} = \\ \text{等々} = \end{array}\right\}$$

一般的・相對的價値形態に於ける諸商品、u量の茶、v量の珈琲、w量の鐵、等々は、たゞ一つの商品、一クヰーターの小麥（一般的等價商品）に依つてその價値を統一的に表現する。かくすることにより

（一）各商品の價値は、それ自身の使用價値と區別されるばかりでなく、あらゆる使用價値と區別される。

（二）總ての商品は價値を小麥といふ一商品に共同的に表現することにより、價値としては彼等は互に等質なること、彼等のうちには共通物の存することを示すのである。

（三）總ての商品は、單に質的に平等なものとして現はれるばかりでなく、同時にまた、彼等の價値の大きさを一個同一の材料・小麥に映すがゆゑに、量的に比較されうるものとして現はれる。即ち同一單位に還元されるのである。

價値が何故等質物でなければならぬか、商品交換が行はれる爲めには、何故、質的統一・共通單位への還元が爲されねばならぬかの問題は、價値形態は何故に、商品世界の各商品が一個同一の商品にその價値を表現するところの一般的價値形態、貨幣形態にまで發展せねばならなかつたかの問題の解決により答へられる。貨幣の必然性は交換せられるものゝ質的統一の必然性を示すに外ならない。諸商品はその價値を貨幣に於いて統一的に表現せざる限り——貨幣形態にまで發展せざる限り——全面的交換可能性を獲ることが出來ぬといふことは、商品交換が行はれる爲めには質的統一、共通單位への還元が前提されると云ふことを示してゐるのである。故に等價交換の命題は、何等先驗的無論證的前提ではなく、價値の表現形態より看取せられた實證的前提に外ならぬ。而して資本論冒頭の分析もまた、價値形態の物語るところを展開してゐるに過ぎぬ。從つて、其個所に於いて取扱はれる 1クヰーターの小麥＝2ツヒヾドネヾの鐵 と云ふ方程式は、價値形態の端初を形成する『簡單なる、單一なる、また偶然的なる價値形態』ではなく、『一般的價値形態』を分解して得られる無數の方程式中の一個として解されねばならぬ。蓋し、前者は價値の性質を殆んど表現し得ぬものであるのに反し、後者はそれの最も完全な表現形態であるからである。

マルクスの共通物存在の必然性の論證は、（一）需給作用による市場價格の偶然的動搖及び、（二）利潤率平均作用による生産價格化、の二重の捨象の下に爲されてゐることは既に屢述べたところであるが、マルクスの叙述には、殊に第一の捨象を讀者に見失はしむるが如き個所がある。

『交換價値は先づ、ある種の使用價値が他の種の使用價値に對して交換せられる量的關係——比例として、すなはち時と所との變更するにつれて絶えず變更する一の偶然的關係として、現はれる。商品に內部的な內在的な交換價値（valeur intrinséque）といふことは、それゆゑに一の矛盾であるかに思はれる。吾々はこの問題をもつと立ち入つて考察して見よう。』（傍點筆者）-（註四一）此叙述に於いては明らかに、需給作用による價格の偶然的動搖の捨象なき有りの儘の現象を問題としてゐる。然るに、これに續く『擴大された價値形態』による共通物存在の論證は偶然的動搖の捨象の上に立つてゐる。そして、此の兩文の間に何等、この捨象の斷り書きは存せぬのである。故に吾人は往々にして、この兩文に續く叙述に於ける、1クヰーターの小麥＝2ツヒヾドネヾの鐵 なる商品交換の方程式を、動搖して止まぬ交換比率の中の一つを取り出して論じてゐるものであるかの如き解釋を下す。そこでこれがマルクス批評家の論難點の一つにさへなるのである。誤解の責任の一部はマルクスの叙述に存するが、吾人は前

揭、資本論第三卷第十章に於ける、需給作用による動搖捨象の理由を想起しつゝマルクスの眞意の存するところを汲まねばならない。

註三一　Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 383.

註三二　小泉信三『價値論と社會主義』第三篇第一章　勞働價値說と平均利潤率の問題『經濟原論』第三篇第一章第十二節價値法則、生產價格說の不兩立　參照

註三三　二木保幾『マルクスの價値論に於ける平均觀察と限界原理との矛盾』（中央公論、昭和四年十二月）

註三四　高田保馬『勞働價値說は支持し得らるゝや』（改造、昭和五年七月）

註三五　Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 489. 河上、宮川譯（岩波文庫）一三三頁

註三六　Marx, a. a. O. S. 51. 河上、宮川譯　一三七—八頁

註三七　Marx a. a. O. (Herausg. V Engels) S. 3. 高畠譯第一卷第一册七頁

この引用個所はマルクスがその表現に甚だ苦心せるものゝ如く各版夫々表現の仕方が異る。然し乍ら何れも論旨及び論證方法は同じである。玆には此個所の叙述が最も詳しいエンゲルス版を引用したが他の版をも參照せられたい。

長谷部文雄譯　資本論初版鈔、岩波文庫）二三頁

Das Kapital. (Volksausg.) Bd. I. S. 5　河上、宮川譯四〇頁

註三八　Marx, a, a. O. (Volksausg.) Bd. I. Erstes Kapitel. 3. B.

註三九　Marx, a. a. O. Bd. I. Erstes Kapitel. 3. C.

註四〇　Marx, a. a. O. S. 4　河上、宮川譯　四〇頁

C

交換さるゝ二商品間の共通物存在の必然性を論證したマルクスは、更らにその分析を進めて共通物とは何か、質差を捨象した揚合後に殘る等質物とは一體何であるかを追求し、抽象的人間勞働に到達する。この所謂蒸溜過程に對してマルクス攻擊は集中される。ボェームは、共通物として抽象的人間勞働を抽出するマルクスの論法には、たゞの一片も積極的證明が見出されない、この抽出方法と同一の權利を以つて吾人は使用價値一般、更らには他の多くの共通性質をも交換財の共通物として抽出しうると論じ、價値と勞働との必然的關聯の證明の無力を難じてゐる（註四一）。此點に關する諸批評家のマルクス攻擊も概ねボェームの所論と其軌を一にするものである。

資本論冒頭に於ける使用價値規定よりすれば、使用價値一般が問題となり得ることは云ふまでもないが、マルクスが、かゝる使用價値のみならず、更らに質差を捨象した社會的欲望一般、社會的效用をも取扱はざるを得なかつたことは前述せるところである。故に筆者はマルクスの所謂蒸溜方法の場合、商品分析の行はるゝ意義を沒却し去る限り、社會的效用の殘溜することは必然的であると思ふ。然し乍ら本節Aに述べられたところと同一の理由に基き、商品分析の前提を理解する限り、勞働のみが問題となり他の共通性の顧みられなかつた所以も了解されるものと思ふ。

マルクスは資本制生產諸關係の特質・自然法則の歷史形態を追求して、これを勞働生產物の價値形態のうちに見出し、かゝる前提の下に商品の分析を行つたのである。故に、彼れが商品交換のうちに求めたものは、人と人との社會的關係、私的勞働の社會的聯絡、に外ならなかつたのである。這般の事情は既に詳論せしところであるから此處に繰り返へすの煩を避けるが、かゝる前提の下に於いてのみ、勞働以外の一切の共通性は問題の埒外に驅逐せら

れて、社會的實體・社會的勞働のみが抽出せられたのである。商品分析がかゝる前提の下になされる場合にのみ、始めて、勞働と價値とは必然的關聯を有して來る。

『經濟學批判』並びに『資本論』初版に於いては、マルクスの上述の意圖が比較的容易に窺ひ得る。エンゲルス版並びに平民版が、交換せられる二商品間の共通物として勞働生產物と云ふ屬性を抽出し、更らに、勞働の質差を捨象して抽象的人間勞働を殘溜せしめ、問題の蒸溜方法を行ふ個所に、資本論初版に於いては次の一文が置かれてある。

『だから諸商品は、それらの交換關係から、あるひはそれらが交換價値として現はれるところの形態から・獨立に先つ價値そのものとして觀察さるべきである。

使用對象あるひは財としては、諸商品は物體的に異れる物である。それらの價値有は、これに反して、それらの統一を形成する。この統一が生れるのは、自然からではなくして、社會からである。種々の使用價値においてのみ種々に顯はれるところの、その共通な社會的實體は――勞働なるものである。』（旁點筆者）―（註四二）。

此論法に於いては、先づ共通物の社會的實體たることが主張され、次ぎに勞働の質差の捨象過程を經ずに、その實體は勞働であると述べられてゐる。マルクスが交換關係のうちに人間の社會的聯絡を求め、商品のうに社會的實體――社會的人間勞働を求めて此分析を行つてゐることが充分に窺ひ知られる。多くの共通性質は社會的實體たりえざるが故に捨象し去られたのである。『經濟學批判』に於いても、抽象的人間勞働を抽出する前に、共通物は『社會的勞働の具體化』であるとの主張がなされてゐる（註四三）。

共通物が勞働でなければならず、且つ又社會的勞働でなければならぬとの論證は、商品分析の意義、その前提のうちに存し、究極的には勞働生產物の交換關係を通じて貫徹する・彼の自然法則に於ける個人的勞働の轉化の必然性のうちに求められるのである。質的統一、同一單位への還元の必然性に關しては、既に價値の現象形態・貨幣形態より歸納して實證的論證をなしたが、現象形態がこれを物語る所以は、表現さるべき實體が抽象的人間勞働、社會的平均勞働量であるからであり、更らにこの實體がかゝる特質を有する所以は自然法則に於ける・個人的特殊勞働の社會的平等勞働への還元の必然性に求められるのである。個人的勞働は社會的勞働とならねばならぬ、社會的總勞働は社會的欲望に向つて比例的に配分されねばならぬ、而して比例的配分の前提たるものは個人的特殊勞働の社會的平等勞働への還元である、これは生產諸關係を貫くべき自然法則であり、如何なる歷史形態をも貫徹すべきものである。商品の交換關係、勞働生產物の價値形態はこの自然法則の歷史形態に外ならぬ、故に、それの分析に於いて見出されるものは、社會的勞働、抽象的人間勞働、社會的平均（必要）勞働量に外ならぬのである。而も、既に述べたる如く、勞働の比例的配分を貫く歷史形態として勞働生產物の價値形態を觀察する時には、共通物としての實體は飽までも技術的意味に於ける社會的必要勞働量であつて、需要的意味に於ける社會的必要勞働量は單なる前提たるに過ぎない。此點よりしても、假令社會的效用、或は社會的欲望一般が、交換せらるゝ二商品間の共通性質たりうるとはいへ、これが實體として抽出されざることは當然である。以上の如く商品分析を行ふ場合のマルクスの眞意を汲む時には、何故使用價値一般が捨象されて、抽象的人間勞働のみが殘されたか、は自ら明瞭になるものと思はれる。

註四一　Vlg. Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 388–95.

註四二　マルクス、長谷部文雄譯　資本論初版鈔（岩波文庫）二六―七頁

註四三　Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. 3. 河上、宮川譯　六一頁

D

最後に複雜勞働の單純勞働への還元の尺度の問題が殘る。マルクスは以上の如く交換せられる二商品間の共通物を分析して抽象的人間勞働を得、かくして價値の質を規定した後に更らにその量の規定に進むのであるが、此抽象的人間勞働の質的規定の際に起つて來る問題は茲に更らに還元すべき別の質差、即ち複雜勞働と單純勞働との區別の存することである。マルクスは此問題に對して(一)兩者の質的差異は複雜勞働が單純勞働の自乘又は倍加として看做されることにより量的差異に還元し得る、(二)『かゝる換算――還元――が絶えず行はれてゐることは、經驗が示す、ある商品は複雜勞働の生産物であるとしても、その價値は、その商品を單純勞働の生産物と同樣のものたらしめ、從つてまた、それ自身は單純勞働の一定分量を表示するにすぎない、種々なる種類の勞働がその度量單位としての單純勞働に還算せらるゝ種々なる比例は、生産者の背後における或る社會的過程によつて確定され、且つそれ故にそれは彼等にとり慣習によつて與へらたるものなるかに見える』（旁點筆者―註四四）と述べるのみであつて積極的に還元の尺度を示さず『この還元を支配する諸法則はまだ茲では考察すべきではない』（註四五）とか、『この換算が如何にして規制されるかは、こゝではどうでもよいことである』（註四六）と云ふのみである。

ボェームを始め多くのマルクス批評家は、勞働價値説の致命的難點としてこの還元尺度の説明なきことを難じ、これを客觀的交換過程の還算に委ねるマルクスの論法は、説明すべき對象を以つてそれの論證たらしむる循環論であると攻擊する（註四七）。

然らば複雜勞働の單純勞働への還元の尺度を明らかにせざることが、勞働價値説を循環論に陷れ、その致命的缺陷となるものであらうか。筆者は既に、マルクスが自然法則の必然性より價値と勞働との必然的關聯に到達せることを論じた。自然法則としてマルクスの呼ぶところのものは、何等假設的非現實的なものではなく經驗的實證的なる社會的生産の根本前提である。この貫徹すべき形態を交換關係の中に見出し、かくして初めて彼れの勞働價値説は得られたものである。故に勞働價値説は複雜勞働の單純勞働への還元の尺度の説明を缺くとも、その成立の根據に何等の微動だに受けない。社會的總勞働の配分の必然性は、個人的特殊勞働の社會的容量への・同一單位への還元を前提し、この過程は吾人が認識しようが、しまいが交換過程に於いて常に行はれてゐる筈である。即ち彼の自然法則の貫徹を必然的なりとする限り複雜勞働の單純勞働への還元の必然性も認めねばならぬ。複雜勞働の單純勞働への還元の必然性を認むる限り、この還元の尺度を説かずにかゝる換算は生産者の背後に於ける社會的過程によつて絶へず行はれてゐると云つたところで何等の循環論ともならぬのである。『交換比例（從ひて價格もさうである筈であるが）は勞働量の比率によりて定まる。勞働量の比率は交換比例に於て定まる。これだけの理論の形式ならば、勞働量と云ふのに何を置き換へても、矛盾なく主張し得らるゝであらう。勞働量と云ふ代りに長さといふも容と云ふも一樣にまた』（註四八）高田教授はかく攻擊せられるが、交換關係に於いて勞働以外の長さや容積が決して問題となり得ざることは既に證明したところであるから茲に繰り返へさぬが、複雜勞働の單純勞働への還元の尺度が示されず、これが交換比例を通じて知り得るとのマルクスの叙述を以て、勞働量の比率は交換比例に於いて定まるとの理論の形式である、と解されることは曲解も甚だしきものと思はれる。資本制社會に於いては自然法則は吾人の意識より獨立した盲目的必然的法則として貫徹するものに外ならず、吾人がこれを經驗的に觀察しうるのは物的外皮の下に於てゞある。物と物との關係を通じて、人の社會的關係を知り、交換比例を通じて勞働の還元の比率

を知ると云ふことはかゝる歴史形態にあつては當然のことである。『勞働生産物はそれが價値である限りにおいてはその生産に支出された人間勞働の單なる物的表現である。』といふ後世の科學的發見は、人類の發展史に時代を劃するものであるが、しかしそれは決して勞働の社會的性質の對象的假象を拂ひ去るものではない。』（註四九）本質の認識は現象形態より爲さねばならず、このことは決して本質の本質たる所以を損ふものではなく、現象形態が本質を決定することを意味するものでもないのである。マルクスの場合には本質は勞働でなければならぬ、複雜勞働は單純勞働へ還元されねばならないとの必然性は證明されてゐるのであるから、この還元の尺度の缺如は決して循環論を意味するものではない。故に、此問題に於いては勞働量の比率は飽くまでも基礎的であり、これによつて交換の比例が定まるのであるが、吾人は交換比例と云ふ現象形態を通じて經驗的に勞働量の比率を認識せざるを得ぬのである。

この還元の尺度の說明なきことが勞働價値說の成立根據を動搖せしめぬとは云へ、その理論的建築の未完成を意味するものたることは爭はれぬ。これを說明せんとの試みは古くよりマルクシストの間に行はれたところであり、現在に於いてもサヴェート經濟學界の論爭問題となつてゐる樣であるが、筆者は未だその解明に到達して居らぬ。ヒルファーディングの解決（註五〇）では（一）複雜勞働に於ける剩餘價値の發生が說明つかなくなり（二）且つその剩餘價値率が明瞭を缺く。其他の試みに於いても單純勞働の剩餘價値率と複雜勞働のそれとを等しきものとする前提の下に論ずるものが多いが、筆者はかゝる前提が許さるべきか否かについて幾多の疑問を持つ。たゞ茲に注意すべきはかゝる複雜勞働にはその中に天才的要素の一分子だに含ませてはならぬ、と云ふことである。修業熟練の基礎の上に立つ複雜勞働は、短期間に於いては自由競爭の存在を許さぬが長期間に於いてはこれを許す。然じ乍ら天才的要素は全く獨占的性質のものである。レオナルド・ダヴィンチや雪舟の名畫の價値が單純勞働の何倍かのものとして、かゝる換算の基礎の上に決定せられて來るものではないのである。かゝる場合にはマルクスの獨占價格の理論（註五一）が適用さるべきである。天才的要素を複雜勞働の單純勞働への還元の問題に導入することは多くの混亂を惹き起す。筆者は兩問題を峻別すべきであると思ふ。

註四四　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 12. 河上、宮川譯　五四—五頁

註四五　Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. 6. 河上、宮川譯　一一頁

註四六　マルクス、長谷部文雄譯　資本論初版鈔　二八頁

註四七　Vlg. Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 396-401.

吾國に於いては高田保馬教授が特に此問題をマルクス價値論の缺點として强調せられてゐる。『勞働價値說は支持し得らるゝや』改造昭和五・七）參照

註四八　高田保馬　前揭論文

註四九　Marx, Das Kapital. Bd. I. 38. 河上、宮川譯　一一〇頁

註五〇　ヒルファーディング、塚本三吉譯『勞働價値說の擁護』（改造文庫）三五—五二頁參照

註五一　Marx, a. a. O. Bd. III. 2. S. 275. 高畠譯　第三卷下三一五頁

七

以上の叙述は、資本制社會の利潤率平均作用により惹起さるゝ價値法則の現象の仕方のモディフィケーション、即ち生産價格化を捨象して、最も豊熟した姿に於ける商品を單純商品生産の條件の下に考察して來た。次ぎに吾人は

かゝる捨象を徹回して資本制生産の現實の姿に近づいて行かねばならぬのであるが、茲に起つて來る問題は、（一）彼の自然法則は資本制生産に於いて如何なる現象の仕方をとるか、（二）利潤率の平均作用に依る生産價格化は果して資本論冒頭に展開せられたる價値法則を止揚するものであるかの二問題である。

第一の問題については、先づ社會的欲望の現象形態たる有效需要が更らに資本制的搾取――對抗的分配關係に依り著しき變化を與へられ、勞働者階級の社會的欲望は殆んど顧みられず、少數資本家階級の欲望のみ十二分に現はされ、かくて社會的欲望は甚だしき歪みを持つて現象するに到ることを指示せねばならぬ。而も資本家階級の個人的消費には限度がある。彼等の蓄積衝動はその消費を制限すると共に生産を益々膨脹せしめる。生産の膨脹力とその生産物に對する需要即ち市場の擴大とは全く別個の法則に依つて支配せられるに到るのである。そこで市場の擴大は生産の擴大と歩調を共にすることが出來ない。こゝにおいて衝突は不可避的となり、しかも此衝突はそれが資本主義的生産方法そのものを爆破するのでないかぎり、他に何等の解決の方法を生み出しえないから、勢ひ週期的となる。かくで資本主義的生産は一の新たなる『循環論法』を生み出すのである」（註五二）。

需要供給の不均衡は各生産部門間の勞働分配の不均衡としてのみならず、需要全體に對する供給の過剩として現はれる。資本の有機的構成の高度化に伴つて發生する産業豫備軍は、己れの勞働を社會的勞働に轉化することを拒まれた勞働群を意味する。私的勞働の社會的勞働への轉化が障碍に逢着すると共に、社會的勞働に轉化して價値を形成せる勞働も市場の相對的狹溢の爲めにその價値の實現がなし得なくなる。

更らに價値が價格の旋回中心となつてゐる間は、勞働配分は傾向として、社會欲望に比例せしめられるが、一度び利潤率平均作用に依り生産價格が成立し、これが價格變動の中心となるや、勞働の均衡的配分は常に一定の歪みを持つことゝなる。蓋し價格の價値に一致した狀態が勞働の均衡的配分を意味するならば、價値より一定の距りを有する生産價格に市場價格が一致する狀態は均衡的配分の曲歪を意味せねばならぬからである（註五三）。

註五二　Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, S. 296.　河野、林譯　反デューリング論（マルクスエンゲルス全集十二卷）四四三―四頁

註五三　資本論第三卷の各所に於いて、マルクスはかゝる歪みを問題とせぬ樣な口吻を漏らしてゐる。例へば既に引用せる次の文言に於いて『若し、との勞働分割が均衡を獲てゐるとすれば、相異つた諸職業群の生産物は價値（更らに進んだ發達の下に於いては、生産價格）を以つて、又はこの價値乃至生産價格の、一般的法則によつて決定されるところの變形たる價格を以つて販賣される』と述べてゐるが、市場價格が價値に一致する場合と生産價格に一致する場合とは勞働配分の上に上述の如き相異を有することに注意せねばならぬ。

第二の問題は勞働價値說の逢着する最大難關の一つであつて、リカヾドオをして勞働價値說を修正せしむるに到れる問題もこれである。マルクスの資本論第一卷現はれるや（一八六七年）、如何にして彼れが此問題を解決するかの疑問及び期待先づ起り、第二卷序文に於いてエンゲルスが主としてロードベルトスの亞流に向つて此問題の解決を宿題として提出することにより益々世論を刺戟し（一八八五年）、かゝる經過の後に、第三卷出でゝ（一八九四年）初めてマルクスの解答が發表されたのであるが、マルクスの批判者はこの解答に滿足せず、第一卷と第三卷との矛盾撞着が、ボェーム・バヴェルクを始め其他諸學者に依り論難せられ、我國に於いても小泉、河上、櫛田其他諸氏の間に論ぜられたることは前述せるところである。

筆者は既に述べたる如く、資本論冒頭の商品分析を、（一）需要供給作用の捨象（二）利潤率平均作用によるモディ

フィケーション、即ち生産價値化の捨象の上に立つものと解することにより、第一卷より第三卷への理論發展には矛盾は存せぬものと考へる。

更らに、資本制生産に於いては各企業内部に計畫的共同勞働が發展するとは云へ、その外部に於いては生産は依然として無政府的であり、寧ろかゝる企業内部の生産の計畫化がこの無政府狀態を益々激甚ならしめ、「商品生産上の諸法則をより公然とより力强く作用し始め」るものである。單純商品生産に於いては商品生産の諸法則は何等の變形を受けぬとは云へ未だ萠芽的、未發展であつた。この假睡んでゐた商品生産の諸法則が目覺めて全面的に發展するのは資本制生産に於いてゞある。從つてかの自然法則の商品生産社會に於ける歷史的形態たる價値法則も資本制生産の盲目的統制者として而も最も完成した姿で强力的に作用せねばならぬ筈である。價値法則は最も豐熟した姿で現はれるやそれは利潤率平均作用による一定の資本制的モディフィケーションを受ける。商品が全面的に發展するのは資本制生産に於いてゞあり、それが生産價格化に依る變形を受けるのも資本制生産に於いてゞあると述べたのはこれを意味する。價値法則は、寧ろ資本制生産に於いて初めて全面的に展開するものと云はねばならぬ。

然らば價値の現象の仕方に於ける變形は如何にして生ずるか。價値法則が貫徹する以上、價値そのものゝ規定には何等の變化もないのであるが、價値の分配關係に變化が起りこれがモディフィケーションの原因となる。生産手段の資本制的占有それ自體は何等の價値を生むものではないが、其れは賃勞働者の生み出す剩餘價値を自己に歸屬せしむる力を有する。剩餘價格が資本に分配せらるゝ場合、その分配率は資本の大小に比例する。これが利潤率平均化の原因であり生産價格化てふモディフケーションの根據であるから、かゝる變形は價値の分配の問題に過ぎぬ。即ち資本制生産の發達に伴ふ私的生産内部に於ける社會的生産の發展、これにも拘はらず生産手段の領有形式が依然舊態を呈してゐること、この關係より生産手段の分配には變化が齎らされ、自ら所有し自ら勞働せるものは生産手段の所有より引き離される。この生産手段分配の變化は生産物分配の變化、價値分配の變化を生ずる。この價値分配關係の變化が惹いては生産價格化を招來するのである。價値の分配の變化は價値の實體に變化を惹起するものではなくその現象の仕方を變化せしむるのみである。從つて筆者は生産價格化は價値法則を止揚せず、むしろ價値法則の發展に外ならぬと考へる。甚だ不完全ながら以上に於いて筆者の第二問に對する考へを述べたつもりである。

茲に殘された問題は、單純商品生産に於いても、生産手段の生産に要せられる勞働量の差異と自由競爭とが存する限り、利潤率の平均化が招來され、價値通りの交換はこれを認め得ないとの批評である（註五四）。即ち價格が價値に一致する爲めには異産業間の完全なる自由競爭を前提とするが、生産手段の生産に要せられる勞働時間に差異ある限り、かゝる自由競爭は生産手段の生産に大なる勞働時間を要する部門の供給を減じ、然らざる部門の供給を增す。從つて、生産手段の生産期間「待つ」こと（Waiting）に對する報酬――利潤――に相當する部分の價格の相違を生ぜしめ、かゝる意味に於ける利潤率の平均作用は價格の勞働價値への一致を妨げると云ふのである。この樣に考へて來ると、價値と價格との一致の前提それ自體が、價値と價格との背離の原因となり、勞働價値通りの交換は何處にも見出されなくなる。從つて、利潤率平均作用の捨象と云ふ資本論冒頭商品分析の方法それ自體が許す可からざるものとなる。

マルクスが、かゝる「待つ」ことに對する報酬としての利潤を認むる限り此矛盾は免れ得ぬのであるが、彼れがかゝる利潤概念を認めざることは云ふまでもない。マルクスは利潤を本來、勞働力の商品化、資本――搾取關係の成立を基礎として說くものであつて、「待つ」こと或ひは「節欲」の如きは、資本所有が剩餘價値の分配に與る場合の

隨伴現象に外ならず、價値創出の原因たらざることは勿論、價値分配の要因でもないのである。たゞ資本制生産の外觀が、かゝる隨伴現象が利潤を生むかの如き意識を吾人に生ぜしめるに外ならない。而もこれを單純商品生産について問題とすることは、資本制生産の意識を以つて單純商品生産を類推するものではなからうか（註五五）。

此問題は、單純商品生産に於ける競爭と資本制生産に於ける競爭の相違、同一産業内部の競爭と異産業間の競爭との區別の問題と關聯して、ボェーム・バヴェルクとヒルファーディング、小泉教授と河上、櫛田諸氏との間に戰はされた論爭問題であるが筆者はこれを充分に論ずる素養なきを遺憾とする。たゞ、單純商品生産を以つて、價値法則が充分に發展した典型的な姿で現象せる狀態と爲すことは甚だしき誤解であつて、この段階は生産價格化のモディフィケーションこそなけれ、價値法則は未だ萠芽的、未發展の狀態にあり、これが全面的に展開せられるのは資本制的モディフィケーションの下に於いてのみであると云ふことに留意せねばならぬと思ふ。

註五四　V.g. Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 354-366.
小泉信三『價値論と社會主義』『搾取の理論』（三田學會雜誌昭和五・六）
『經濟原論』『餘制價値と利潤』（三田學會雜誌昭和六・十二）

註五五　『資本制生産方法の基礎の上に於いては、新たに附け加へられた勞働を代表するところの價値をば、勞銀、利潤、及び地代といふ所得諸形態に分割するは、極めて自明のことゝなり、此等の所得形形態の存在條件が最初から缺如してゐる處にも……との方法が應用されるといふ有樣である。語を換へていへば、何もかも類推に依つて此等の所得諸形態に包攝せしめられるのである。』
（Marx, Das Kapital. Bd. III. 2. S. 412.（E 訳）高畠譯　第三卷下四一〇頁）

十九世紀に於ける歐米の經濟發展

――ノオルスの遺著を讀みて――

高村象平

リリアン・ノオルスの生前の著「十九世紀の英國に於ける商工業革命」の續卷たる Economic Development in the Nineteenth Century; France, Germany, Russia and the United States. 1932. が刊行された。私は以下に於いてその大要を紹介したいと思ふ。

十九世紀の經濟發展上に於ける佛獨露米の四大國間に於ける相互作用及びそれ等諸國の一般的經濟發展上の類似と差異とを究明すること、それが本書の目的であるとは、ノオルス自らがその序文に於いて吾々に示すところである。「十九世紀の特色は機械と科學とによつて自然支配を始めて可能ならしめた點に存する。各國に於ける産業革命とその社會上の結果とに就いては既に可成り論ぜられてゐるが、機械の世界的影響に關しては描かれること尠く、交通の機械化の進展によつて生じた政治・商業・財政・社會上の變革に就いてはこれまで殆ど重視せられることが無かつた」（p. vii.）。この爲に本書は存在理由を持つといふ著者の意圖は、果して貫徹されたものとして吾々の眼に映ずるか。勿論この書がノオルスの遺した原稿の若干と倫敦大學に於ける講義ノオトとより成り、それを纏めた人が著者自身でないといふことを、吾々は考慮に入るべきである。そして恐らくノオルス自ら本書を構成する全部の